宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

頼政の射たモノ

―平家物語の内と外―

櫻井陽子

はじめに

源頼政については多くの逸話が残されているが、今回は、平家物語巻四に載る頼政の武勲譚を取り上げる。「頼政の射たモノ」とは、頼政の射た変化（へんげ）を指す。頼政説話の形成過程及び享受の様を、平家物語の内側と外側の両面から考えたい。なお、紙幅の都合上、ここには「内側」部分を要約した。「外側」部分を含めて全体を再構築して「明月記研究」一四号（二〇一六年一月）に、「平家物語が描く源頼政の変化退治・鵺退治」と題して掲載したので、詳細はそちらを参照していただきたい。

一　頼政の武勲譚―覚一本平家物語と諸本の存在―

平家物語は以仁王の乱を次のように記す。治承四（一一八〇）年、頼政は後白河院の皇子、以仁王を唆して平家打倒を企てる。以仁王は悩んだ末に決意し、全国に令旨を出す。令旨はやがて源頼朝や源義仲などの蜂起を促し、全国的な反乱を導く。しかし打倒計画はすぐに発覚し、頼政は自害し、以仁王も流れ矢に当たって死ぬ。

乱の収束後に頼政生前の逸話が語られる。平家物語にも様々な種類がある。まず最も知られている覚一本平家物語（応安四〈一三七一〉年制定）巻四によって紹介する。

最初に頼政の不遇を救う和歌の才能が語られる。頼政は、「摂津守頼光に五代」にあたり、「大内守護にて年ひさしうありしかども、昇殿をばゆるされず」。そこで、Ⓐ「人しれず大内山のやまもりは木がくれてのみ月をみるかな」と、不遇を嘆く歌を詠み、昇殿を許されて正四位下になった。次に、Ⓑ「のぼるべきたよりなき身は木のもとにしゐをひろひて世をわたるかな」と詠んで、三位になった。

次に、変化退治が語られる。近衛院の時代に、東三条の森から黒雲がわき上がり、「変化」が主上を悩ませる。公卿達は、かつて邪気を退治した源義家の先例に倣い、頼政を召す。頼政は一矢で射止めた。変化の姿は、「かしらは猿、むくろは狸、尾はくちなは、手足は虎の姿」という合体怪獣で、声だけが鵺であった。左大臣藤原頼長が褒美を与える。頼長は、「ほととぎす名をも雲井にあぐるかな」と詠み掛け、頼政はすぐに、「弓はり月のいるにまかせて」と付けた。このように即興で歌を付けるのは歌人として非常に大切な才能で、皆は非常に喜び感心した。そして、変化は流された。

続いて、鵺退治となる。二条院の時代に、鵺という化鳥が鳴いたので、再び命じられた頼政が一の矢で驚かせて飛び出させ、二の矢で命中させる。今度は右大臣藤原公能が褒美を与える。公能は、「五月やみ名をあらはせるこよひかな」と詠み掛け、頼政が、「たそかれ時もすぎぬとおもふに」と付け、領地をもらった。

変化退治は現実離れしているものの、十分に怖しい。しかし、そこに同じパターンで、しかも鳥の鵺退治が続くと、話が小さくなり、面白さが減じる。なぜ印象を薄めるような作り方をするのだろうか。

二　平家物語諸本の存在と頼政の武勲譚

平家物語には様々な種類の本があるが、左表に揚げたように、この話は諸本によって錯綜している。覚一本は語り本系の一種だが、同じ語り本系の他の種類の本（巻四）には変化退治説話しかない。

	読み本系平家物語					語り本系平家物語				
	延慶本	長門本	四部本	盛衰記	闘諍録	**覚一本**	屋代本	斯道文庫本	中院本	頼政記
巻一	Ⓒ	Ⓐ Ⓒ ③ ②	Ⓒ	Ⓒ	Ⓒ	Ⓒ	鵺	（Ⓒ）	Ⓒ	／
		鵺	鵺		変 Ⓐ ①		Ⓒ			
巻四	Ⓐ Ⓑ **変** **鵺**	欠	Ⓐ 変	Ⓐ ① Ⓑ ② 変	欠	Ⓐ Ⓑ **変** **鵺**	欠	Ⓐ Ⓑ 変	Ⓐ Ⓑ 変	Ⓐ ① ② Ⓑ 変

巻一「御輿振」：比叡山衆徒が内裏に強訴に押しかけるが、頼政の護衛する門の攻撃は止める。
欠：欠巻（或いは欠落）　変：変化退治　　鵺：鵺退治　　／：該当説話が無い

① ツキ〳〵シクモアユブモノカナ　イツシカニ雲ノ上ヲバ踏ナレテ　（盛衰記による）
② 水ひたりまきのふち〳〵おちたきりひをけさいかにありまさるらん　（長門本による）
③ とを山をまほりにきたる今夜しもそよ〳〵めくは人のかるかや　（長門本）
Ⓒ 深山木のその梢とも見えざりしさくらは花にあらはれにけり　（覚一本による）

平家物語にはもう一種類、語り本系とはかなり様相が異なる読み本系がある。分量が多く、本によって性格も異なり、様々な話が入り込んだり、配列が異なったりしている。

諸本の中で古さを評価されてきたのが延慶本である。延慶本とは、延慶二、三（一三〇九、一三一〇）年に書写された本を、百十年後の応永二十六、二十七（一四一九、一四二〇）年に再度書写した本で、現在、大東急記念文庫に所蔵されている。百十年後の書写であっても、内容は延慶書写と同等であり、延慶年間の面影を残す古い本と考えられてきた。しかし、応永書写時に、覚一本の本文によって書き直している部分があり、延慶書写と応永書写とは距離があることが次第に判明してきた。

巻一の願立説話、巻四の頼政説話と咸陽宮描写の三箇所は、数行あるいは説話単位で覚一本を混態させている。巻一・四にはその他にも、単語や文節単位で擦り消して、上書きや傍書を加えている。応永書写本の巻一と巻四は同一人物の書写になる。書写者の机上には覚一本が備えられていたのである。

他の巻は巻毎に事情が異なる。たとえば、巻五の本文には「異本」という注記が入り込んでいる部分がある。この「異本」は覚一本ではない。現存しない読み本系の一種と考えられる。それ以外にも、源平盛衰記（平家物語の

最も長大な異本。以下「盛衰記」的な本文を混態していると疑われる部分もある。このように、現存の延慶本（応永書写本）の全てを延慶時の書写の復元と考えることには危険が伴う。[1]

さて、変化退治と鵺退治が並立しているのは延慶本と覚一本だけで、この二本は同文である。よって、延慶本の頼政説話は覚一本による混態部分と考えられる。それでは混態以前の延慶本の頼政説話はどのような形だったのか。以前、盛衰記や『頼政記』に描かれる変化退治説話と同様であったと考えた。『頼政記』とは内閣文庫所蔵の零本である。江戸後期の書写だが、「底本は室町時代の中期ぐらゐに溯上る」と推定されている。[2] ちなみに、長門本は延慶本の年の離れた弟と言われるが、巻四相当部分の後半がない。『頼政記』はその欠落を埋めるような形態だが、本文は盛衰記に類似している。この盛衰記と『頼政記』には変化退治説話しかない。

延慶本の展開にも注目される。変化退治・鵺退治の次に中国の故事が引かれて、別の化け物、即ち鉄を食う虫（貘）の話となる。それは、「アマタ獣ノ形」、「畜類七ノ姿」を持った合体怪獣であった。そして、「今頼政卿所射ノハケ物モ、彼貘ホトコソ無レトモ、（中略）不思議ナリシ異禽ナリ」と結ぶ。ここには鳥の鵺退治はない。そこで、延慶本の古い形は、源平盛衰記、『頼政記』のような変化退治だけであったと考えたのである。

しかし、盛衰記には独自の話が多く取り込まれており、盛衰記、『頼政記』共に、変化退治の中に、鳥の鵺退治的な要素も入り込んでいる。これらの問題を処理しきれずにいたところ、最近、四部合戦状本（以下、「四部本」）の巻四を読み直す機会を得た。四部本は古態的な側面を持つ一方で、略述や杜撰な改編も併せ持つ、扱い難い読み本系の一本である。巻四にも独自の改変が多いが、それを除くと、この巻に限っては、延慶本が延慶書写の時に使った親本と、四部本が書写する時に使った親本とは非常によく似たものであったと思われる。[3] すると、頼政説話も四部本を基にして考えられると思い至った。

四部本の頼政説話は、不遇を救う和歌の才能の話を変化退治説話の次に置き、Ⓑの和歌も省略している。このように問題はあるが、四部本にも鵺退治説話がない。変化退治説話の内容は覚一本と大きく変わるわけではない。表現面では細かく異なるものの、他の読み本系と共有する表現もある。

ところで、盛衰記には頼政の和歌が多く載る。Ⓐの和歌によって四位して昇殿を許されたあとに、「始テ殿上ヲ通リケルニ、アル女房ノ、ツキ〴〵シクモアユブモノカナ」と詠み掛けると、頼政がすぐに、「イツシカニ雲ノ上ヲバ踏ナレテ」と返したというやりとり（①）がある。そして、Ⓑの和歌のあとには難題和歌を命ぜられる（②）。②は説話集『今物語』十三話を改作した歌である。盛衰記以外にも①や②を有する本があり、盛衰記独自の増補ではない。すると四部本が和歌を省略したと想定できる。

覚一本によって混態が行われる前の延慶本に載っていた頼政説話は、不遇を救う和歌二首に①（あるいは②も）があり、鵺退治説話はなかったと考える。

三　頼政武勲譚の成り立ち

左に頼政武勲譚の構成要素を抜き出した。

頼政記	盛衰記	闘諍録	長門本	四部本	覚一本・延慶本
応保（1161～1163）	（巻十六）平治二年（1160）	（巻一）		（巻四）	（巻四）仁平（1151～1154）
二条院	二条院	二条院（幼帝）		二条院（幼稚）	近衛院

鵺退治説話	変化退治説話					
	東三条森 獅子王・衣 五月余 左大臣頼長 五月闇…	東三条森 獅子王・衣 夏 関白太政大臣基実 **郭公…** 五月闇…（異本）	東三条森 獅子王 五月廿日余 経宗右大臣 **郭公…**	（巻二） 鳥羽院 衣 五月廿日余 左大臣 五月闇…	（巻一） 鳥羽院 衣 五月 頼長左府 五月闇…	東三条森 獅子王 五月廿日余 大炊御門右大臣 **郭公…**
					（巻四） 応保・二条院 衣 五月廿日余 大炊御門右大臣公能 五月闇…	東三条森 獅子王 四月十日余 宇治左大臣 **郭公…**

延慶本・覚一本を除けば、変化退治の時代設定は二条院の時代（一一五八～一一六五）、更に、登場人物の官職などを勘案すれば、平治の乱（一一五九）後と考えられる。これは頼政が大内守護であった時代でもある。平家物語の本格的な始動は永暦元年（一一六〇）、後白河院と二条帝父子の仲の悪さを象徴する二代后の事件である。それと時を同じくする変化退治となる。この時代の京の街と朝廷に蠢く不穏な空気を変化が背負い、それを払拭する大内守護、頼政が登場する。なお、覚一本（延慶本）は、変化の話の次に鵺退治説話を加えた。そこで、変化退治の

話を少し溯らせて近衛院の頃とし、鵺の話を二条院の時代にと、時代設定を組み替えたと考えられる。

四　変化説話の誕生―『十訓抄』と平家物語―

なぜ頼政は、現実とはあまりにも懸け離れた化け物を射ることになったのか。原拠となる話・事件について様々に論じられてきたが、特に注目されるのが、説話集の『十訓抄』（一二五二年に序が成立）である。平家物語は、成立年代や原型など一切不明だが、一二四〇年代には原型ができて、順次、増補・改編が繰り返されていったと考えられている。一二五〇年代は平家物語の成長の時代である。『十訓抄』を原拠としている、あるいは何らかの関係があると考えてよかろう。

『十訓抄』第十―五十六話の頼政の話は平家物語と類似している。高倉院の時代に、御殿で鵺が鳴き、不吉なこととして頼政が召される。頼政は、五月雨の悪条件が重なる中で、小さな鳥を見事に射る。当時中納言だった後徳大寺左大臣藤原実定が褒美を与える（史実としては、実定は当時中納言ではない）。実定は、「郭公雲居に名をもあぐるかな」と詠み掛け、頼政は、「弓張月のいるにまかせて」と付けた。そして、中国の弓の名人養由の話に触れて終わる。

こうした鵺退治説話をもとに、平家物語は変化を退治する話に変えて、「郭公」の連歌を使ったと考えられよう。平家物語が鵺退治説話を新たに載せる時には、似て非なる「五月闇」という二番煎じのような連歌を作り出さざるを得なかった。

ちなみに、『十訓抄』第十―三十四話には頼政の話がもう一つある。Ⓐ「人しれぬ」を詠んで昇殿が許されたと

いう話で、これも平家物語によく似ている。『十訓抄』はおそらく『千載和歌集』に拠ったと考えられる。『千載集』には、二条院の時代に詠んだ歌とはあるが、この和歌によって昇殿したとは書かれていない。実際の昇殿は、二条院が没した翌年（仁安元〈一一六六〉年）であり、従四位下になったのはさらにその翌年である。歌を詠んで昇進できた話は、説話としてはよくあるが、現実社会では難しい。

『十訓抄』第十の標題は「才芸を庶幾すべき事」である。和歌を中心とした様々な芸能によって利益や幸運を得る話を収めている。従って、頼政が昇殿を許されるという結果は必須である。平家物語では更に話が増幅して三位昇進まで加わる。平家物語の作者が『千載集』を見ているのは確実だが（忠度の都落ちの話等）、頼政の話に関しては、『十訓抄』の影響も強く受けている。

『十訓抄』第十―五十四～五十六話には武芸の話がまとめられている。五十四話の始めに「養由が芸」に触れ、最後に頼政の武芸を語り、養由に言及して武芸の話を締め括る。が、ただ武芸に長けているだけではなく、その基本には「文」が必要であると説く。『十訓抄』での頼政の話は、武士が文を兼ねることを尊ぶという流れの中で紹介されている。『十訓抄』を参考に平家物語を作り上げようとすれば、鵺よりももっと武芸を強調する、より強烈な対象が必要であったろう。

五　変化説話の誕生―時代の風潮―

鵺よりも強烈な対象として、なぜ変化が選ばれたのか。元木泰雄氏の論[4]を参考として考えたい。

摂津源氏で頼政の先祖である頼光は、武家の棟梁として活躍していた。しかし、頼光が生きていた平安時代の頼

光の活躍には化け物退治はない。それが次第に化け物や酒呑童子を退治するようになっていく。氏はそのきっかけとして、『古今著聞集』（一二五四年成立）所載の「説話を萌芽として、頼光が王権を守護するために討伐する対象は、単なる賊徒から怪異、怪物へと発展してゆく」と指摘する。また、河内源氏の義家は頼政の先祖ではないが、頼政が変化退治を命ぜられた時の先例として登場する。義家がもののけを撃退した話が『古事談』（一二一五年以前の成立）にあり、「河内源氏は宗教的・呪術的要素も含めて王権を擁護する存在となっていった」とも指摘する。

十三世紀以降、頼光や義家たちの武勲が成長していく。十三世紀は、平家物語が形成されていく時代でもある。頼政の文武、特に武人的側面を強調するにあたって、源氏の先人たちの活躍が怪物退治に肥大していく時代の風潮に沿って、頼政も化け物を退治することになったのではないか。

また、頼政の武勲譚は、大内守護を象徴的に捉えた話とも概括されている。[5] 更に、Ⓐの和歌も「大内守護」と関わることを加えたい。頼政説話は、「大内守護」をキーワードとして組み立てられてもいる。

六　平家物語における頼政の謀叛

それでは、なぜこれほどまでに頼政の説話が必要とされたのか。

平家物語では、頼政が以仁王を唆して乱を起こしたと描く。しかし、歴史的には、以仁王主導とされる。以仁王の性格も、平家物語では、自分で決断を下せず、占いや周囲の力によって決める、弱々しく受動的で、悩める風流貴公子と描かれる。対する頼政は、謀叛の首謀者として、謀叛を起こす必然性を持たなくてはならず、また、武人としてふさわしい武芸譚も強調されなくてはならない。しかし、頼政の武芸譚は、『十訓抄』の鵺退治しかなかっ

たと思われる。よって、全く違う話を創作しない限りは、鵺退治を加工するしかなかった。

平家物語の構図から見ると、物語の前半では平家は朝廷の側にいる。従って、頼政は平家や社会に私憤や恨みを抱き、それがきっかけとなって謀叛を起こしたと描かれ、その行為は非難される。しかし、後半では流れが逆転し、平家は悪人として追放され、頼朝が権力を握る。作者は物語後半まで見通しているので、前半の展開にあっても、後半の論理を兼ね備える必要がある。よって、頼政の行為を批判しながらも、一方で、実は、かつては、朝廷（大内）を守護する人間で、朝廷を守護する立場で活動していたとも書いておけば、頼政の立場を逆転させることができる。「大内守護」は大変都合の良いキーワードであった。

以上、延慶本を軸とすることから離れて、頼政の変化退治説話の成立の経緯、舞台設定等を考え、改編の様を見てきた。平家物語の多様性を楽しんでいただけたら望外の喜びである。

注

（1）拙著『『平家物語』本文考』（汲古書院　二〇一三年）

（2）高橋伸幸「内閣文庫所蔵　増補系平家物語零本に就きての研究〈本文篇〉」（「札幌大学教養部女子短期大学部紀要」19号　一九八一年九月）

（3）拙稿「延慶本平家物語の陥穽―以仁王の乱の描写を対象として―」（鈴木彰・三澤裕子編『いくさと物語の中世』汲古書院　二〇一五年八月）

（4）元木泰雄『源満仲・頼光―殺生放逸　朝家の守護』（ミネルヴァ書房　二〇〇四年）

（5）生駒孝臣「源頼政と以仁王―摂津源氏一門の宿命」（野口実編『治承～文治の内乱と鎌倉幕府の成立』清文堂　二〇一

四年六月）

〈キーワード〉

平家物語　頼政　変化（へんげ）　鵺